

冊 數	番 號	部 門
三 五 四	一 四	三

近江輿地志畧

十六

近江國輿地志畧卷六十六

臣

寒川辰清編輯

聖例郎中一

史以野別君の文字曰中紀ヨリ至西漢より秋風等之
は豈獨是今の聖例郎中一トシ

古事記曰美知能字斯玉之弟水穂真若王者近淡海之
安直祖又曰近淡海之安國造之祖意富多牟和氣云々

安のふハあの既ナリ郎中一トシ一トシ一トシ

那のちもしくともたゞハ陰をせば葉をらよと云
ひや此郎の地勢乾と翼とい長て度一艮と坤とハ

日	時	四十一	月	正月
時	日	九	月	正月
日	時	九	月	正月
時	日	九	月	正月
日	時	九	月	正月

經一 は忍良 南と坤と、巽と乾と、山と乾と、湘

して東と艮と、震生那より文り翼、甲か那の界と接

通す

三上莊

少鶴村 南鶴村のゆうある。三上神事の吉日は村

扇陣をあすかむ。

あま山 少鶴村のあま山。理石石壁山とよびてせし

うち中世ちづく。

南鶴村 少鶴村の南にある村。村名の由

東の松あり。

支木集

やそりの傍りの根もくほとれもわざと植えよして

一 横山

名亭 宽治元年太嘗大會御紀方の亭

一 神主の横の山。危立ち立てことありともあま

一 三木

鶴山花候。角すひきうて強ひ人をなす。鳥居あり

一大房のうちの山をとくらん鶴の山れもすげの

山をとくらん鶴の山れもすげの

櫻山梢のやまとまえぬがおたぐわる花うとをんも
長秋録集

後成

松^{ハサウエ}木よ枝やくに櫻山花をちやせよもやくひん
一 櫻生村

小櫻村の東より村あり

一 古城山 櫻生村ありお侍は源五郎徳^{ハシタ}ちうと
云一 おさくふ塙あり墓を土佐ほ心の人切場と云

一 福林寺跡 口村もありお侍福林寺とすむりべ地
と行宗のちかして行基の時代と云ことをうれ九勝の
石塙行り土佐を是を陵と云經不とて少子よまき

石多ノ

一 呂登山 同村ヨリ山也櫻多年社を大路の傍より
至形けふも呂登山也。玉方がや一 純綴の形とと體形
密セリ土佐の名つらを立ち土佐これ也。其處實
立ち死の日^ハぬとも曉く。玉方^ハ金一ヶ後邊は
ことく山ともあれと云甚非あり

一 三上村 西南^ハ山也有り而謂山也者也櫻村大半
小野村給宿村前田村半小野村ゆきうちちあく三上より
此村へ十三町有

一 三上山 寄枕之神山^ハ伊佐佐木の名と云山勢

一 墓石を山より移す所も多士等はあれハ万石ウ
ちうは山西より山下へ落ぬあり、竟孝
左の記す云々_{アマガシタカヒコノシテ}
一 里ひ立る土の根をすわ薪をもてて上の山の傍の雲
土俗又曰孝灵帝の御宇一處よきひの地折て湖水を
あり玉陵のろ山とちう土づの五十九山之上
山とも云信角也タモナリヤることありかう安
吉女もあつた
一 前代旧事本紀曰神功皇后三年庚子淡海國言不知足彦
者女不知好媛君產一丸石形如形難印十二夜間成大日_ト

長成山人名此山曰產神山云々 旧事本紀傳承あつて
以多絕極度その説徧矣又及山之て爲ありけ山
そぞと大畠麻蘇す而上にて山高さ十丈、而下
石伝の地也下り土俗これを产王と云毎年五月十日
产王祭として祭奉村より忌火の行也其火也土俗是
あ力山の八九小洞穴あり基源して石瓦瓦也土俗是
を蠶蛻穴と云也是古に山を七色也經一蠶蛻也
土く首もは洞穴入夜て壁上也度て甚多く移る
大蛇をくも大蛇亦多矣佛也たのも多也移る
きく蠶蛻の東北を巣じ多也後にて中嘗火死也

あよは山も嵯峨山と云多天氣の櫻吹亭と云
にけ地ト本山トうさシか山トもアラカツトす條
の櫻吹トアラカツト上トアラムトする人アリト筆
を宣マウルトアリト云マウル大藏院ト
丈木集ト宗小園ト也ト大藏院ト有アリト
も鳥ト考アリ詫マウルあけるト出アリづらトの神トあられトを
同

經トアラカツト山トの山トく若主ト居アリ勢ト多トの也ト
丈木集ト也ト大藏院ト有アリト
足元トあら方ト上ト山トの松ト也ト八百萬ト代トの寺トもあらん
同

新勅撰集

佐原松

毛トをアリ三上トの山ト也トあようけト也ト波波ト也トやすトの川波
丈木集ト也ト大藏院ト有アリト

古きトの鳥ト正トの鳥ト也ト尼ト庵ト也ト一夜トの不アリも雲ト傍アリ
同

後トとアヤウてアリとアテマばアリの山トもアリの月ト絶
鴛峰詩集経過三上一山阿一百足馬螺曾作魔不被
夢憐無笑鼈勢多橋下欲食蛇

古奇

一五九 詩人名トもアリをアリ二上トの山トのサキトのつけト

一三上神社 神也ハ莫大也のト一樓門降殿今より
櫛の表老年中ニ連りてたゞと珠結あり神あり
祭礼是毎年四月ニ申の日九月十九日地主君家内
お拂あり神五人私家二人社傍一人神子又主社一人
乃リ祭事の神伊弉諾ノ天照太神あり延喜式所謂
御上神私是あり

古事記曰娶近淡海國之御上祀以伊都玖天御影
神之女息長水依比賣云々社家相兼曰伊弉諾尊
与天照太神之兩座也仍称天御影日御影社神社
考曰旧記曰三上明神者元正天皇養老年中按養
老元年

自天降於此處名曰日本第二忌火或問當官齊官食
千陶器炊于瓦火金又忌草服火奴之類称天下第二之
忌火也奈何云皆疾機巧之智欲早計之故也盛神貴
乎淳朴賤機巧且古人祭服屢以草造之本朝疾皮草
之屬竊惟古人用之不忘其本也朝人疾之避其流云々三
代實錄曰貞觀元年正月二十七日甲申奉授近江國三上神
從五位上類聚國史曰貞觀十七年三月二十九日授近江國
三上神從三位云々

舊本記云鱗の表よ神私三上明神と齊官をとけ神リテ
十六十四代の序門元正天皇の清多齋老年中は天

降日本東二の忌火まゝは不満を抱ひて能室といひ
者こそ社は移つてふる振ニ上の山の林まゝさざれそ
きするまの代までに於茲より三十神名のうちもす
とちよこまくらり

西林寺 清泰宗安土淨巖院の末寺あり

一家泉寺 妙光寺村はあり清泰宗安土淨巖院の末寺也

一東光寺 妙光寺村より編記曰柳は列祖別院主法
妙光寺村日向山東をもひ意在大師の足基うして医
王尼逝安慶の臺地へ裡宮傳教大師七就尼滅七福良
隣めある一刀三乳の大師跡也佐の基一塔下に佛丈

一玄天寺を係の爲密意在大師寺もよ安寧ノゆ
而あらり貞觀の寺號御不を作り毎年三月勅使を
ゆりとて勅使臣今高司馬司馬四の父も有有條の坊衆
盈亂をあく入征夷將軍源賴朝に建久元年庚戌冬
十月上洛しひかく通ぢるもとてよまくよ葉師や東の
大光明院院主をゆりて大口拂信作あら引之と云一
を考証一安意在大師將軍の全般お取の曼荼羅
一曰原の後神樂也考附りゆきよ何ん來きりて不
一信長公淡井佐藤義高人義の時を失ひたるよ焼矢一けりよ
是被多る像を曰ふが在寺村の事多よつて一石舟

餘多の雨落ちたる所と云々

一二上天神社 妙見寺村の方

一中畠村 妙見寺村の山奥の方

一格子寺古跡 中畠村の方 お侍天を祀る神社

一の紅葉村 唯多寺の方 は格子さんを祀る神社
一抗日寺 妙見寺の方 は格子さんを祀る神社
一のうちノカヨ南村は大御言の末隙と云者
一格子寺は舞昌の時 大御言の内閣樂さんと呼ばれ
後を傳へてもうけ多く源あへー大御言ハサウエー
官名の大御言アモアモアフスヘー

一今川殿塚 中畠村の東端城と云ひてあり 妙見寺村との
一界は有土佐云今川殿の櫓アリと云ふ外記は見え
あらと云中畠村は妙見寺村へ移築の方跡は行方大
きも草木も生れぬ二つあつて巡査によねをつへたりは巡査
の日未だ見て乞うてことを聞くよし

一後藤村 中畠のゆゑある村なり 天正年中の村あり 古
の地ハ古壇と考へて村の名すあり 天正年中今之地
民家を遷して中山町の裡を大福と云ひ

一子安地名を産 紅葉村の方より土佐
先をもとづくべの姓と云紅葉寺例村の方より

江行中古跡のちよりは地名のあり様子ハ中
一細村もあらう。宝妙寺もおのめあらう。は僅石もと
一歴とこそ、形刻の神殊能あり。大小の主徳ニ神あれ
一土俗のぬともうべどじりうちもあらべ。お傳ニモ但小
一弘法大师の御事と云はるが如云。と後の時妙教も村東
走る。よりは西へ大走るやにて糸井^{糸井村}を交へ。故御名云
糸井走るよりは二像をば地へ移す。疫疾強病を除る
云是語あはれと云ことあり。地主少くいぢる者故也。
安産を祈る者又云是處の地主を云或は土俗云はる
一餘あるを以て一村火災ありと天正某日^{某日}と火

災のうきひあ

一正一位行幸^{大内}神 組金村もあらう。勅使の年記
一詳よりは古老曰九百軍許^兵のことをうつとは神使
馬の聲^聲もと^とへり。參詣毎年四月二日よりお撰
毎年九月二十日もあらう
一唯心寺 因村もあらう。不景山^院壁等と景清云
一家家廟^院未承ち。所當念^の事^事あり。組金茶の
女唯心尾の元茶もあらう。ゆく幸^とす。組金茶ハ以
處山の坊官南村の地^地誠もあらう。僧曰^方全^全年^年以
よま創す天台宗もあらう。ニ万七年以^前より佛去

家とあきよ方三年前にあを大よかにへる
うちの祀張寫有とある今のである。河中郷村松葉
ちのをすすりをすすつて河濱地松樹長り
化や秋迦梨肉身の全利南の什物あり
一甚照寺。國村より一向宗要を教す。本木經聲歸
國寺の事すあり。釋迦と天台宗もうちち僧曰六
万年高徳色有寺ありと

一四家村 裕金村の南より家續あり。又御役金村
一の界ハ八幡社の傍の小浦あり。左は釋迦ハ是色郊
原田畠より後よりは御堂のうち其時は不小

一民家只口耕主を能人よ多う。つて用て四家と争
ひと云ふ。二口は御家一帯の事業、一
今蟲殺セハ耕むわざもやもて三耕業者ともち後
のハ耕業者十セハ耕むわざとも今はハ耕業の名
あり。山脚は谷の三耕業者や表裏の七ヶ所の家か
そくか。

一八幡社 四家村より神社を神使とて祭礼舞年

四月十日お舞九月十五日

一愛宕社院社 八幡社の氣より

一社す

一四家村より一向宗要を教す

一 領洲村 四家村の西より領洲村市場と云至國
一 と傳若ひへまは村始焉は地をあくに天正年中
今のが地は民家をうけも罷たる葉浮と云ひ之

一 正一位新川大明神社 墓例村より土佐玄立入村
十種除の多岐ちう祭紀毎年四月二亥日左撰
九月十三日うけ移を神使とを今のが原の額ハ妙
法院堯倫親王の拂手あり 三代実錄曰貞觀十
一年十一月二十日戊申授近江國從五位上新川神正五
位下云々又曰仁和元年九月廿一日壬寅近江國正五位
下新川上神授正五位上

一 光福寺 国而より新川大明神の社僧ちう拂浮
碑宗教禪の派京山嵯峨並持菴のますちう
一 秀峯寺 邊例村より秀峰派並持菴のます
一 十輪院 国村の入より開基延元居士かすむ地菴菩
薩毎夜三昧をあぐ是經をの説人圍夜邊例川の傍
よ速ひ所を乞うて是れの功大ちうとし川へ一木を立久く
人後もさうかく地菴の化身貴一

一 淨光寺 国村より淨光律宗寺前地菴もの事也
一 浄海寺 国村より一向家東が地菴の本流ちう

竹堤の若山中と号すを新川大野村の畠内中より比
一山正光坊は地は一寺を建て天台宗のちに比
處山の末流す新川河件のちの隣もあらむ
はり寛文年中より左へて社地とち地ともと西光
坊そのうちある地をまた上人を校ひは因て甚め開
基して淨滿寺を建立せし代ニ一向宗とく
東や那の末流といひきり源そり氏十四代義利家
義家のもとに信長をと云ふ南朝は舊衣主の子
左近を以て淨滿寺の名跡とを傳の左近有船を傳
來ト左近の名前も布を晒す蓋也聖例晒布の
什物記録考。悉焉とある。

一川枝云々 日本記天武記元年秋七月壬寅男依等戰于安河濱云々

原二六桜田川あり六山上川あり左永川の少よりニ
流今すて一とかる是地例川あり純院山畠村の少
よりあれと齊トモアリ御例川ハシメツカワ山畠村の西より將
も西面水保村の南を歷木の傍の少ヒタチを過入
は川中一町の至二町半の所万里辻村の北を過入
ニ町半計あり甲斐郡正福寺善光寺村の北を過入
四五町半あり少石交の川口ハシメツカワより常川カニ川より
水あり川系とあつて若者よ取水をぢり常よ水

一あり少水を除キ一里ハシメツカワ南へ後く谷を下りうち
後御ハシメツカワ山畠村の至高の所より桜村を過入すて
流るがよし水川ハシメツカワのちを多くまづ少ヒタチを
一徑をの大路中山道ハシメツカワを横うつ橋ハシメツカワを過入

玉葉集

諸人とも皆少ヒタチを小聲ヒナガラを駒ハシメツカワも少ヒタチをやまの川旁
夫木集

船ハシメツカワ日ハシメツカワあきのほの魚ハシメツカワて魚ハシメツカワやうこやまの川旁

卷考

陸房

ヤスヘマフロヤマの山ハシメツカワの山ハシメツカワ小卒ハシメツカワ兵ハシメツカワを友ハシメツカワの山ハシメツカワ

史木集

近ノや野邊の旅人をもんやまの泉とぞきくぬハ
茅廬集

七阿

ち山のやまのこはゆしやものに波もむせふあり
万葉集十三云

ワキモコニタモアミノヤスナリヤスイモチスニコヒウタルカモ

吾妹兒又モ相海之安河ノ安寐毛不宿尔戀渡鴨
一立入村 鹿川の南若身村の東にある村也

史木集

後光

うわらが立入村の山裏、海どくれの轍かをん

一易村 立入村のあよわの村也

一西隆寺 易村より西條山西隆寺と云ひ

天台宗は西教のまぢうりに一日東近江を巡

後する日寺山禪よびて角西隆寺の住傳もあり

一傳云古者鹿戸白雲先生を大徳と歎仰して易村に
のうき来まつて一岩窟小かくれとすよ先こととぞ
一やうりをして後一もと達今の西隆寺とぞ

をすのほれひ一岩窟一二年以當過もあそび
其岩窟の中方に石室あり額く延慶もの用とす

之を 且根は縁ちく、先證古元和の達は年も
歴山の僧徒は岩窟を額く延慶もの用とす

豪傑の達札岩窟にて留まつた地にて
さう一因上の山中にて岩窟ありと申す皆度
其又はやゆる數多の岩窟なり

近江國輿地志畧卷之六十七

五

寒川辰清編輯

一里中在守山寺所據广田市之宅今委空

卷之三

一宇山村は多利の西にある村也。中山道の駅場なり。

村西那立身村南澤皆氣流也今高

水戸は川を異へて水戸津川とす。川も皆渺々

のうちも村の用事はどう入る水筋かく小川うち保
えぬ後を極まる小舟終る眠りてあぐれ川へ一
駒森山のあす入りはほの柔柔天弘教院を極ま
あり。さうらんときお経日を竟し。歸らむく
一木向二つよすありあらの川更へぢり。古澤舞昌の地
やく。舞家多々。毎年七月七日土日青七日をも
市内より先をち山市と云近づり。經きの而翁を
村本や高さ山と号すること。淫吉彦真玉や山
の民にせよ。本ち田畠を。元を。民居也。りくにう
やあつて。山と。山城を。え。七日立家と名づる

と。あつ院の辻瀬よ尽と。著聞集。曰。左大臣
輕守山。やく。ね。せ。う。き。く。れ。ふ。わ。際。四。帝。時。役。使。一
多う。も。ち。ざ。の。さ。う。ま。み。の。ア。キ。そ。く。財。政。也。辛。ノ。名
も。じ。う。が。い。み。う。き。一。く。ら。ん

古今文集

紀貫之

白毫毛を以てあひて。毛が。柔柔。色。有。多。

子載集

金毛。白毫毛を以てあひて。毛が。柔柔。色。有。多。

壬生忠見家集

中勢家集

人目之守山有寫するを乞ひて達をがく禁あらん
一東門院 守山がありてつ院ち山ちと等ひ以廟山
延暦^の志^をあらう 院山を傳教大師^と及
縁起曰延暦四年乙巳傳教大師開闢廟山而四
境各構門當江東守山村建東門云臣接東門院
云名是致
向古一人異ニ未彫刻二王像不日而即成諸人曰我
是密迹金剛也言記不見其也至今曰二王町移

安東門里人傳言當寺二王千人力蓋以執金剛自
造于十四年乙亥田村將軍東夷征伐之時路過
此地祈冥助於仁王速討賊而飯陣依是俗曰門
出仁王其後將軍於此地建伽藍本堂七間四面
檜皮葺 安千

手大悲像清水寺觀音同
木延鎮作也 桓武天皇勅賜守山本東
門院号并納言吉見金杰播广田三箇莊以充
寺供修造之費嵯峨天皇弘仁元年庚寅三月湖
水夜々有一道光明從水底出及七日湖上人民大
怪於光之處投網引之得十一面觀音尊像諸人
無不驚歎刺史達于天聽詔使安法華院為鎮

國之道場中古依當院廢壞並本尊千手尊像安置之云云

寺僧云守山寺と号すあるが極武天皇廢山店
ちの言あるべし佛事行向く糸山も守護一を守
あひとて地を守る山としちも山寺と号す守
山驛の名は因る傳教大師南朝甚麼の姫七八人の
家臣を石を走り下せ人の武士は又多く旅店を
はへ往來の旅人の助力を乞うてももの破壊を補
へんとて守府終よかとあり故よぞ家を豪家と考
也東云又曰近所守御者柳の古廟よ

千手觀音の买場とせんと號すれど古來山口そ
を去洛東は水寺を建立を故よ千手の像一軀を
南寺よりまき柳の古廟今ハ其地ともいもす終ふ
寺の水のわどとてあるのつるよぢり南院の後
記ハ寺甚院沈寂王の序すすむ又別毫中興山の
寺院の事すなり

仁王門は仁王のことと云ふころ土佐守侍射松雲
の堂拂面と云額、後若狭守天皇の勅額あり
是と云東院と云額、後若狭守天皇の勅額あり
信忠の多々よか門と失せた附近を興院

西光院親王ニモトモ不すに今寝てきまう
一本堂 千手觀音の像延長の作脇吉備軍地蔵像
思ひゆつ天像あり但又傳教大師の像あり十一面觀
一青の像油色よりあり本あり
一護摩堂 ある不動明王脇土觀迦俱は竟瓊上人
の像あり
一桓武天皇陵 なまの石塔あり
一法花塔 石の塔あり傳教大師によまを守りて
一天滿天祚秋 隆宇あり多羅綾相應の美あり
お侍菩薩相應左世の日朝使小車ありふこと竹ノ園
一奈良守山中之彦古跡あり弘法大師あり
天照大御宮山王燈院大將軍や
一庚申堂
一將軍塔 田村たう塚あり
一大將軍社 杉木小く燐火あり地主ありと云
一法花院跡
一玉賣坊跡 け二坊前寺の塔すありよ信長の象形
かわく
一青柳水 或云青柳の井と云是も山寺のつかい

一 有水是もすり源和氣上流の日出水ふく馬と飲

ト云

一二王町 守山より今里のまわり禮古審迹全刻碑
一 東一地あれどニ二王町と云り車八東つ院ち山寺
一 の名下より云

一 葉神堂跡 因村より今ハモ跡のと禮古ハ御鹿苑
一 附之と云

一大日堂 因村より民家の下有刻禮堂の跡也

一天地大日堂をも大日堂ハ弘法大師の作也と云

一大光寺 因村有仙日山大光寺と号曹洞宗稱もす

岡山天德和尚ハ純毛正徳持ち通称禪仰十哲の其廻一人

一 寺記曰持統天皇七年癸巳十一月近畿益須郡醴泉
出刺史奏之勅法真善往真義等誠當法負爲靈
區創寺号醴泉寺相續法桐宗僧居焉其後台
宗祐元法印住持元平日屡蒙天德和尚示誨依此
捨寺爲禪居請師爲岡山鼻祖師入院岡堂演法
夜庭上有大光明從地涌出寺內煥赫近隣民家以
爲失火也奔聚寺凌晨堀堊光之處則有扁額云
一日山之三字現然曰改醴泉号大光寺醴泉之蹟至
今在寺門南俗呼曰甘香池師住山後征夷大將軍

尊氏公暇日請師向禪要且聞件之事增加恭敬
延元元年丙申將軍重建堂宇仏殿方丈厨庫
山門鐘樓全備矣至天文年中諸堂悉炎上前右
府信長公再與本尊歡迎如來傳教大師作脇士
文珠普賢運慶作宝丘鎮守弁財天智證大師作
塔司布金菴本尊地藏菩薩脇土掌善掌惡小野
篁作也桂習院吉祥院頂月院東昌院宗祐軒音春
菴以上六坊中古廢壞而今其蹤而已也云云

一守吉寺ち山すありは惣山ちばなると号す時宗京
四條金光明寺の末派すりやむら御陀仏招生報喜

勝ら俱立像を極きわみ子の安坐仏ありと云間山を極
ちす中興ゑる傍そばがり隠承元壬午年時宗の祖
一遍上人のち牙書しりとす是事ことは生うり一匝念仏の後ごは
く後修しゆよ附宗つきむねといひて有あり凡走まるより以降承元
年下しもり享保十二申年こうほ二月八日六年じかんとうり以降承元
一玄輪げんりん有あり附天女まづめありも多羅葉たらはの曼荼羅まんだら一幅
一尚さう寺ての什物じぶつあり

一阿休通寺あく村むらすあり附宗つきむね善よの寺てすあり
一絲名いっし寺てすあり附宗つきむね西にしの寺てすあり

一園光寺 口村より一向宗本尊を祀るの本寺たり

一開基祐林坊承正十六乙卯年建之あり

一常行寺 因村より一向宗本尊を祀るの末派たり開

基歎五歲以應七年年好建立あり

一淨土寺 口村より浄土宗本尊を祀るの末派たり開

のあちあり開山東譽以應元年好建立あり
口村院公照士郎吉勢毛安らほの作あり思沙つ天
像毛重慶毛化あり能す宇摩神弘法大師作あり

一光明寺 口村より高吉律宗開山春阿久人應安
年中の建立始毛時宗ありよ天和元年の年あり

内玉 南忍野中寺の比丘尼義るの再興すとく
更より高吉律宗寺とあるあり

一善慶寺 口村より一向宗本尊を祀るのあらん
承了承寛正三壬午年建之あり

一常念寺 口村より一向宗本尊を祀るのあらん
善祐開基寛正壬午年年建之あり

一正福寺跡 り村より今も無今も村より

一ノふ人より田地の名とあれり

一養深菴跡 口村よりお傳後藤源也ありと今も

一を名のてゆきり

一耳番池 因村大老の南ぬぢよりは不謂聖閑

一邪智山の醴泉あり因廻町計の泡あり破泡よ候る

一故知山の遠^李征ニ宅村より是を思すよ邪智山と

一裡石大山と云ひ是も尾はまくともぢりと及

一寺より 日本記曰天武天皇七年十一月己亥遺汝門

一法冥喜往真義等試飲近江国益須郡醴泉八

一年正月己亥詔曰粵以七年歲次癸巳醴泉涌於

一近江国益須郡都賀山諸疾病停宿益須寺療差

者衆云類衆國史三十六史也と見えたり

一七年十月己亥を七年十一月十四日己亥正月八年正月

己亥詔を八年春二月十四日詔より涌の字の下に
於の字を干の字より候。病停の下ふちの字よりちよ

字の下ふ候之候のニ字もあり廢毛のニ字あり

穂曰日本紀引日本私記云益須郡今テ野洲郡也

一守山古城址 今其至詳には松代宿家伊豫入居

一哲同右京色輿道を信長々々一無れ一と曰祀又

尼えたり

一守山川 是葛西川の末流あり源ニハ松尾村山有の

山有よりあくと左木村アヌアルのやを僅て葛西川也

金一車より流れてことと村之入村の多よまが一ハ先ヨ
一傍神例川もある一ハ曲折してあるよ流ち山村今後村の中
石より立木横に村芦浦村のゆる崖と湘よ入蓋は川下
ち山歌を傳るかふ名はくと云

一吉原村 ちよのつまよわづ村ありちよの家あり寺山
と吉原の向水を川と云ふ界とし水を川或ひ
更には川はせりちよの用をうちりあす津川の上を
木舟池あり是より高津南の南より

後成

君々代々うきの村民も多まを待ていそまえらん

一慈眼寺 因村より佐志山慈眼ちと年は世よ僧而
帆船の聲を是やかなる大面をもつて之處は矣
三度服士持云天多門天主像 天俱又傳教大師の像
御紀昌史ある土面を帆船の像、傳教大師の
佐治僧古人會云天多門天主の拂拂延暦年中の以
大師入廟アタリ一家園長の法を奏承一年と傳帆
里或と漂洋トム大師の拂拂も帆船を吹拂し梅子ト
けくあらうから時拂幻隱日暮三昧ア入玉壁等の
遙和焉モ不待トカサホの十思一念のギモトナハ智者

を休ましゝへ忽よ牙転拂とよ限れりあ事よ風波
平すとて船をまぬきて往のは來知恙ちく陳歎
経の後本せ候後は安原の佐原とて被候ねのれを
以て御とよやふりあふのそる像を脇三尊を自効
般せりよつて帆船の御事とあはば像ちく後一室め
梵舎を建立一慈眼觀音を彌勒佛毘盧王よりそ
すま無を慈眼寺と名し。像を安置して而後嵯峨
皇の御室弘仁の年智惠の陽夏二十四年造立
ありがゆ。是後あくともとくが作はるやう能事
一城主の祀をすみゆつてある。松玉の御神と号

あらも南寺のかる。かうと云ち僧徒を弘仁の年造
一會を遣京。數多の莊園を専附一坊を賣イラカを爲す
山つ滅むの危惧より火のたびよ便條とありゆを去
跡を村より壁の旁に所す焉り今よ古庵舊寺す
ある。其の跡の寺は今林事にはそる像を祀る
今之地はまだ寺を再建は
一萬佛堂 り境内す有り。する萬佛や來在像は口笑
経書是月光立像也。天子之神將の中より神一神也
一實人傳は仏子未より傳あり

一地元堂

かの三像を写入

一甲庵屋浦跡　土佐國向山村の中よりと今を此處
あらんと云ひ地主ある小松木者流の也月と云ふ事
一ち山甲の事とえ信濃玉安田義司あはりあはり小
保刑親友虜も云者あり　五人舟高志信濃の事の後
人七月某よこれに被甲の事と云ふ事の數を
行なることのやうに詫を本來行とかむかまつてを
仰りあたる事とあり監督事の為の事と云ふ事の事
目が、武士體はもとより亦土佐國の事もありと判
本れり甚強ちり甲のみよもりと云ふ事と云ふ事
こそりとも別をへずとあらからゆび多
一因生大内秋松左衛門より村の少宮通の傳事本の
一中よわり甚強も天王の森と云ひ事不承大臣まよ正
一位因生大内秋松と云ひ事不承大臣まよ正
一太俗曰自其を神使と云ひ事不承大臣まよ正
一五万石太俗お傳事本の事不承大臣まよ正
一四村の事と云ひ事不承大臣まよ正
一めせう聞得りて云々村と難方と云ひ事不承大臣
一風ふと無歳酉月えニ事民人必有私よ傍見
一種興味　口有表の侵田の中より侵表を執筆

のより紀承興を破却一はがよ埋と云今がやくむけ隠
を換もすもとやれど必索ありとゞり

一山王城 国村御子の傍田の中より
一藩方金堺口村御近の傍田の中より土佐守源は
奥者今を參まること年休不就城の主より強々寫る
二城通一城歸るよりて主家の接有て後謀戦を
東照神君は地主と有り翁を實持一松さをり
を土人始て采と云原記には時甲斐の者と曰き
あり得也に別西別那の古代友保尾氏よりとひ
得てより軍家役卒と後を後裔ふ十三人磔刑はがる

は圓ちと興黨あぐ

一弘立寺 国村より一向宗が取るの主より開基教尼
一明徳す。口村より口宗に事あること甚詳す。

一金堺村 守山左衛門の所もあり

一金大納財金堺村より

一山王城口村より古松庵庵を土佐守場と云地先あり

一仁教寺跡

一興波寺跡 口村より土佐守は後古々天台宗の所あり

山つ附屬の地ありて空也の所とも廢して今田側の名

一とある

一 金堯沛堂 口村より下を取る家より甚め上への用
甚あり中古屋も因家も法無もすりとせ役も高も
松原は妻も退將の二もよも法も毎年二月廿日
京東の古堂小さく苔葉のあつとのゆく齊を俗を蜀
ありて是務も因家も法無もあつても
一 善龍寺 因村より而家東を取るものもうち澤を
天古家あり寛文二年一向家と開基教而尼寺
云寛正年の元基ありと云

一 川形が済も入居而城へ云後を又因傍移義
城の時甚正とすより善務もと寺号を號是從

一 瓦のまと詫義の説のまも拂用云
一 圓宗寺 口村より口宗あり車前も左也より
一 は安寺跡 り村より一向宗のちりふ退將と
今ハ寺跡のとある

一 古不確 口村の東の隅もあり大アして古形住も
行思の人多真と云士とを云ひ

一 古城跡 口村もあり今瓦屋の高地とあり土
土俗おほくえり財色屋を今通石川山つらカヒト信也
右古名考改據るあり多國山つらカヒト信也
根信長御信也と是と被も其附信也

一 方方より更によきむすびあり。 様風は多事あつち
つゝ金の壺 右ならひより近一 矢又は田面はすれ
る月の日御まきを後落成。 嵩山信長おまへをめぐ
の蓮ふと人をさうく後後を處山より是を賣ければ
一 舟車東の井底傷ことあり。 あら高日記より
一 月を後取ねよと大坂籠のと記はば。 はかりよ城
をうり人信ちをさる。 信の傳ふれたり

一 庭塚

一 堂塚 御より村田の中もあり。 行と云事をもさぬ
一 橋寺 口付はあらわす私形あり。 売後を橋ちの

一 村と云

一 神社は除地ありと云便之。 今御たてて今御とも
一 携田畠 金堀村の西やある村あり。 携田畠を名
一 產あら。 蓋免村方村。 有村の松室あり
一 八大天皇御擣田村。 あり。 神社を大邑まつ
一 佐辞天女社。 口村もあり
一 金力天女社。 口村もあり
一 大井池。 い所もあり
一 けんきの池わ村。 もあり
一 朝のあに池わ村。 もあり

一 すゑん池 日村はあり

一 かに山間 の日村はあり わけはか箇の集落を瀬除うりと云

一 いふ金む 日村はあり 宅基 併うて 一白塗瓦を多めの

一 末派ちるも

一 素立寺 り村はぢりて近今もうちりきとす年 茶あわを

一 ひら木の森をちると號れ天山観音寺上人自筆の十字を多

一 莲やと人云る仏像はぢり多きも多きも文代もを脇

一 五毛町 日村はぢり而家本郷村紳族ちのまち

一 田中筋角屋浦日村はあり 一所は古跡あり 今民衆

一 十に五町とあひてお侍中世中を有とせらる候と

木の士在住せすよほ士守山を身接广田金善市二宅

一 桂谷せりと云

一 市立農村 佐賀村のゆはあり

一 三木大内秋社 市之宅村はあり 正一位王五大門跡と

一 朝は左角村卑半大内秋社の秋社別大邑を有すあり毎

一年夏秋貯貯二日戌日多處頗ハ大至も後嚴秀云

一 古城跡 り村はぢりこそまも重ねたる房城跡あり孝

一 房、佐々木高代經方の四男承原家行は才代の後流

一 承原大林す。室をう二男大字助安宗、長男ちう

領する所沒度り有て滅を
一 安樂寺 口村より淨土宗圭淨嚴院の事也。あり
未傳從天台宗も。天文五年中建立てて淨土宗とす
ば。元基堂淨嚴院。代仙峯院。上人也。到此山無不
ちと号は額あり。富塙のまほはも。すら。而後
如來慈心の御之不動是沙つの像。正義。の御も。二客
ある。大極那。ありと云
一 三宅か雲巻。口村而雲巻。あり
一 西雲巻。口村より淨土宗。本尊。如意輪。あり
與地を畠巻。二十七経、

浙江國輿地志畧卷之六拾八

曉所
寒川辰清輯

野鶴歌 第三

一
陽生義

大門村櫻の音を聴かず即ち事多々栗山が不思議に思ひ

卷之二

主事の事も重き御一任後代神社の事下さる所

一
三毛村

食の跡うり見本記」毛食とハ天子の御事と御づまく

食し候も之を以て此の七食の端
日か月に於古より十キ年毎也食と立とけりを
是より安寧天下紀小字ニ二年七月丙午朔甲子立
更に國事済毛倉も、予比後力士は御るを
アリ。農地耕首の米穀古來什一の賦とむこうよ
今ハちち、一とくとく村屋の弓小毛食とまく秋モ
潤度租税と約もば百姓の豈のとくに給すすみ
汰りえ早の暮るく豊饒の頃と略足古の改定
租税を今、一とくとくその國の村邑ノ毛食と變て
納毛食の官食を行と來り前以て行する者莫

ト而もとゆくやうに國稅の食人毛行と栗入のことを
司りて、
大學衍義補丘瓊山曰周禮十二荒政是國家遇凶荒之政
救濟之法也遺人所掌是國家掌時收諸委積以待凶
荒施濟之法也棄人所掌是國家每歲計其豐凶以
為嗣歲移就之法也蓋其末荒也預有以待之將荒
也先有以計之既荒也大者以救之矣三代之民所
以遇灾而無患也興矣

一
蓮寺寺三宅村行り一向ふ西を經手の毛鹿うりや
日ちの毛食しばまうり

季の淫祀は安阿波のゆきうり國菴石翁左衛人曰平代
持統天皇七年至己未十月五日陽生月一丈の草作
如水と造立一木と奥三にて邪賀の冷泉湯湯
幸とす一の梵鐘なり不接々と寫る國以改名にて
セ果と名はく天台の幸うつ御は一向之門と傳
を形年の正流とされり別表如上人もとまこと年の事と
かくと云ふ所多々小邪賀山に破り泉涌の事ハ正終少
すもう数らくかこのちへうキのまゝからつて後六
ふうりもとほり御かく今大寺也いと事人てころす

邪賀山

國村主の入へ小竹小山うけ山じへ、ハム
よし山と名えゆづれの山と呼ばひの左邊へりとそく
うち山に國せ例取故すての破り泉の事日下記鑿
もと年々とて山を破り泉をいまのまゆの破り泉と
是とて山とて山を破り泉をいまのまゆの破り泉と
とて山とて山を破り泉をいまのまゆの破り泉と
とて山とて山を破り泉をいまのまゆの破り泉と
とて山とて山を破り泉をいまのまゆの破り泉と

天台よりちふて山林をとほりお行朝長ニシテ御免也
ナガ代秀木下野守は急能は居にて年三月東主に
とまふりをす、義昌將軍もまた仕へとソふ
場尾浦 国村とむらノヨリハモニキ免防在役セ一
鶴賀松原村 は枝ふりと近文九十九ノ川ノ送葉ふ
れ毎年八月十四日

革所中 国村とむらノ國奉はすりとくをもす
大林村 そもねの西ふりとくをもす
多見村 ちね村よりて而ふるあか郷の里風
破壁村 ちね村のいふむねく

猿谷村 猿谷村よりてすらひとくをもす
元太安藤村 けじゆみやうけふとくをもす毎年四月十六日
新見村 は村よりて
猿谷村 りすみやうけふとくをもすの事例うち國奉
通正保三年丙寅年正月の傍承あひ仰ぐとく同
縣下附り
渾多年 同村よりて國奉水至ニ已亥年癸未の國奉
空手年 同村よりて國奉水至ニ庚午年癸未の國
百石年 同村よりて國奉水至ニ己亥年癸未の國奉

山中村　大林村の西小字は、枝村と萬代とし、

高木村　川原吉村から天台傳来

西方寺　同村より向ふ山あらかずの至流。

峰之寺

同村より向ふ山あらかずの至流。

山賀村

同村より向ふ山あらかずの至流。

教子寺

同村より向ふ山あらかずの至流。

五樂寺

同村より向ふ山あらかずの至流。

枝の村

山中村のやゝ北む

大峰寺　枝の村より正一位大師大峰寺と曰ふ。額

とこのすと二行ともす。龜井水とて室人院ゆきま

馬車大市郷より山を越へて山中村の山中村
先高天皇の后衣通地より、其ゆきの御と曰ふ。黒山
うみは、山のまゝに後ろちとよつて

毛持村

枝の村の西北に有り

少林寺

毛持村より海と一体の向東南都

新浦寺

新浦寺より山の東半分、福井寺より太極寺の東半分、一休

本の本條のうちあるをもとのそだと、仲の本條はほくと
遊院の日経僧太山と今してあり、一休の里と

瑞氣寺

瑞氣寺より山の東半分、瑞氣寺より太極寺の東半分、一休

嘗ておまきは分軍事のから廻とゆゑを考案二八月
ノリは別立所小東工を用ひて守護を従入せり
彦曾源く御事御師を従行し、幕林と名より
主の賜のまに改め一之差列。内閣の御越す御会と
佛殿を主として承認五年八月十日御伝達十八年
正月元月の御所と行立の内と云ふ。正御冬月の御因
定の御ゆう御前ふさとを経日行進を以て御伝の
人の中で一首のやうす。もくとまき身と御身を
通じて海の面をもとまくうなれどもおなじ方法の事
新安方家御詔書也。又御傳一五日中傳書也。

稿略
因材をうりてはく西も舞の木奉
新セキ
本屋村、さへあらわのわありてけう木の木の陣といへる
きこひの事、土佐おつゝは古栗をの栗の树とモリ
信、木本の木とモリ、毛、毛ちつゝもろもろ事、
の風はももももももももももももももももももももももももも
役兼給事集了に、毛半信ふもも天文二年十月固事ト
ゆの本、さくらやまんこの木の木の木は紅、紅引木の木
の木ノ下海せり連てううう

福林寺 東院寺よりも手取寺は皆大師の作也

かといへるの事ある

足利守

因材より一室より是年(承元)

足利守

因材より一室より是年(承元)

吉野守

因材より一室より是年(承元)

弓削守

因材より一室より是年(承元)

古峰守

因材より一室より是年(承元)

猪俣守

因材より一室より是年(承元)

八幡守

因材より一室より是年(承元)

鶴見守

因材より一室より是年(承元)

鷹見守

因材より一室より是年(承元)

本居源氏

因材より一室より是年(承元)

善作至

田村主事も善作と申すは太田作

正佐津多氣 因村大田作の御年と申すは太田作

宗正寺

因村主事も善作と申すは太田作

西保寺

因村主事も善作と申すは太田作

笠置寺

因村主事も善作と申すは太田作

蛭原大曾根

善作主事も善作と申すは太田作

中村

善作主事も善作と申すは太田作

善作主事の神社

中村主事も善作と申すは太田作

葉山寺

因村主事も善作と申すは太田作

赤佐寺

因村主事も善作と申すは太田作

赤佐寺

因村主事も善作と申すは太田作

通陽寺

因村主事も善作と申すは太田作

石向寺

甲斐の主事も善作と別駁賀村の主事も善作

十三村

石向村の西小方村も善作と別駁賀村の主事も善作

少佐村

甲斐の東も少佐と桂の田村の少佐も善作

宮尾村

少佐の北も少佐と桂の田村の少佐も善作

飯谷村

少佐の北も少佐と桂の田村の少佐も善作

三郎村

少佐の北も少佐と桂の田村の少佐も善作

七郎村

少佐の北も少佐と桂の田村の少佐も善作

八郎村

少佐の北も少佐と桂の田村の少佐も善作

原村の家で本多猪四郎の書を
御存りなすとてあざやかの事と

西海より北上する。因村へ向ふ立入不可の事多し

甲子ノ國慶太王ハ倫ニテ

はなれ
ラカ

豊後守御年記
はなをうつすとくに毎年四月丁酉
豊後守御年記
はなをうつすとくに毎年四月丁酉

卷之三

長慶元年
其の秋承安後承元はの比めにやうと尋てくそ
をかねて小ちくへりる。又本集後見。尋つてのひきにたれ
てまほのゆでてあはきをひき。類裏名を集記附
テシテ小説すりうりてと某君もせほのゆとなつてく

長はぢめり

大將軍秋風圖卷

因ちゝ者天皇文永二年夏至之の國鑿く

今後は西土を幸めあれうべ

高水
國英乙亥年九月廿四日成於昌黎

第一回は序説の事と並んで太郎の作の筋をたどり、後
を安達の手の下から漏れ出たるは源の本筋である。

西移等。因林山之而至終之年。又東流

西蓮子
因林子而生你這個人事

卷之三

因材より治ちふ安き御薬院のまゝう

之節

之子也。故其子曰之孫也。故其子曰之孫也。

はく画を加筆する事あるべく又福徳とソトノヨリ此處の風山の支配する
五代からも、高源又う更に外と云ひて正觀寺も其の管領所
一刀えれの後、経人皇子十八代後深長院庵之西甲午年更
立高重院を申のし、四百九一年、あるひ
石波院　　因有御町あれば里井と云ふ

五
卷六

第廿四

多せきせのトトカタナリ或シキミサヌルト
カニサムウリモニサヘサニモニ

服士紹爲贊至丈方人中傳子仲益之作之蓋代傳古大手
卷之三

澤
系
序

因村より而至車の利年の事年

深山少鶯一春不知何處去

もまわの車と車をうすく見渡す

生れ大正九年正月十五日午後正月大正九年正月十四日午後正月十五日午後

東方先生の著書を以て、其の筆法を學ぶ。又其の文の體裁を以て、其の筆法を學ぶ。

坂田は若手の多忙中古を教わらずに何の目も付度して

八幡社
日向國
佐土原
八幡四十八
御子主
御子主
八幡主
一社の
御子主
八幡主
何者
御子主
是八幡主
今又
主
御子主
御子主
御子主

秋林子
同上
而至布紗年
之書

新宿の南よりむかう

一 稲荷大明神社 墓原主社 カミナリ 每年六月二日酉時内
西 お祭り

まもとす 田代主の事西多野年のまことち祭隊も

原木よみ

古事記はかの魔女とゆくの力いふれ行ふ今か陽
あらちとあすみうるさくうつて宜行り因に甲冑太刀薙刀
船等を下船多く星のうるおどりとて船をも舟舟と
金の身の傍令ねる。うるおどり船をもゆう河の人
信奉とひびとせよ。

山門社 かの魔女とゆく

一 九山山海石 し門井の入の山中うちも多々ある中一圍
二丈八尺許甚恐れ凸凹のとて或ひありめでちたむけり又ほひ
めす、あはれりち俗五代古事記とし義政と假山の石を
あつて後室にあてて行方一小児隕とい凸凹とせぐく
一處にて、そぞえのみくらむけりと山城主と信濃代
碑のうち不の天体移と寄るれむす。一も相のや中
作村玉井山とよの行文源吉と云ひ是少石とむぎ
とく紀序アーティ八十今年とありとく一株井の石と
うる少石と云ふ事一枚とてそもむけりと一主婦夜に

序第十二題
名古屋守護主

ケテトキニ多見紀ニミ砕破シシテ多摩助取作成
セモも多見紀ニカレハシム石門サリテ中トアリテ
ナリハアラシトモソコニテ多見紀事あリテ西院ニ
立候ヘヤク人多見紀門ミのあ處を行リ門を候ラトビテ
ナリハ阿石今ハ多見紀門ミのあ處を行リ門を候ラトビテ
時川河ひらシ山のあ處のうちアリハ石是うるシナ木水渕
多見紀人ノ多見紀門ミのあ處を行リ門を候ラトビテ
多見紀人ノ多見紀門ミのあ處を行リ門を候ラトビテ
中トアリハアムトモ寄石ナリ

一 榎原也翁 因材山の中逢石行石候ラト候也翁

御終走立ナリハアリト今更久の文等ナリ石面ハアルカリ
近町村ニ小落葉村ニモアリハアリカリ
奉書大野冲 近町村ト行リ年毎四月と己日
西山寺 因材山行石候ラト

落石守候
因材山行石候ラト

多見紀 小径大落葉村入町材種山町材多見紀
多見紀十日行石候ラト打下木と多見紀

七條村 近町村の少見紀

大落葉村
多見紀
多見紀年七月ナリ

多見紀
多見紀年七月ナリ

金佛子

日本之行之始者也。安土之行者既多矣。

四庫全書

同前
同前
同前
同前
同前

古漢心

口を離さず、足も止まぬまま船を守りぬて、此の間中未だ

不無也。因材施教の事より核をすまし、もはや計の
あらう西あれ装へ、もとよりのよし、ると般日が早
よち徳是を重んじ、首領ゆと云ひ大將軍、毛利元
吉、毛利元就と名づけられ、元和九年、日向守
毛利元就、元和九年、毛利元就と名づけられ、元和九年、
元和九年、毛利元就と名づけられ、元和九年、
元和九年、毛利元就と名づけられ、元和九年、

宿所付くはさうさうつまきうとよく歎きつて此で相官
あくまで大京へをへと出でてとおもひ廢と。因が廢
友化。すむれどもひきとおもひてとおもひて切りくらひを
寫書はよむちる。とくとくとくとくとくとくとくとく
手ふ筆保

平治年間 不穏のと例たの傍田町より

入町村 お屋原村の少くらり

長野村 入町村の少くらり

ま木村 も少くの少く、少くお村小町村

とお邊の村とお邊の村とお邊の村とお邊の村とお邊の村

近江國輿地志畧卷之六拾八終

近江國輿地志畧卷之六拾九

宿所 寒川辰清輯

野例郡第四

水戸安積覚翁烈祖成曰慶長五年九月十七日神祖

移陣於永原云創墓記國慶紀大全年
天祐了ゆれ多多付す而り立つて
多矣のえをゆうつるびに附多下ハる四井冬吉至寛年
四月初の年の日三ツキの日カリケレ中の年は日と用ひ得の

年間洋うるは式の日をも將臣類等を乞ひ切満をす
 とくには必ずさへて、延文が年一度ふ土日十日修度五
 百石に在れり。而事原十四百石にて、三百石在年五石
 亦若三載三年以て、或居七年。即日十日修度五石在
 無事水原縣の守、常考山門主。即日、御事乞ひ、傍とさりせり
 て、よしとま候くと、事無事に在れり。か故に役事萬機
 一途殿等、行り。物私小八幡、あまびゆみ、夜叉神のものも
 行り。且面付も、とて、伏せらる。天下安寧の為小姓年
 二月を歎十枚の段匁にて、十匁あり。古例にて、
 本漫地以て、而代名をとて、處所をあざり。或ちと云大内侍

者歟。その時代も、ば事、すく、毎年、ある、月を、乞う歎
 て、欲えり。やうり

一
 奉太宰神社、因紙うり。是に祭居り。心と神と神と支度属
 事と、はる四け、三合の御事下の内うり。

一
 福永寺、因紙うり。清ちふ、三百石迄、御事の差遣

一
 延永二十八年、正月、征夷將軍、源義光の更立より
 著て、佐藤の代うり。是を、御事の、事役小姓、
 今まうりの小姓と、是をして、要跡のことあり。

一 淨方寺　　圓教院　　淨空院

一 草席寺

一 圓教院

一 玄金寺

一 圓教院

一 玄金寺

一 圓教院

一 玄金寺

一 圓教院

一 玄金寺十八年因教院方淨空安樂院の主キテ
一 混居院あるの車坂の門は改年中とて御事の序の
一 改とほやうらゆげに法を傳玉春日作と共作圓教院
一 事立て萬金紅め送湯とて改ふるもとて世古ハ天子
一 うりゆきの圓教院を改め元慶小八事印年四月十八
一 玄金寺三十六年三月十九日より玄金寺始道院

一 売卷福院大和あるの二ノ子ノ右院代吉の弟もすと織田
一 長政の子草率の弟もすとて高庭とし後も御事院の草席寺を
一 伏竹小萬金寺尼尼とて高庭とし後も御事院の草席寺を
一 今ノ子へ継ずやと門及石垣等いあせ早村の草席寺の
一 まつて石垣等り院改二院行りとて院改はんと足れ
一 草席寺
一 因教院圓教院行りをす院改はんと足れ
一 宇多院圓教院
一 因教院圓教院行りとて院改はんと足れ草席寺
一 うりゆきの草席寺の名とて、かくと云々毎年一四五

トのうへは豊富の金で奴を不満にせずも別をちあまむ
ちよせまくと二女より図書小考成したつうち取扱い
家業又おとづれしゆきを今作らうと黒にあか
むきの代をとひてや開拓は終たるがそば此用木
あく春早魃とくをひじらか而歎えども此用木とた
く之にあら後せまくの力がこなすもむれをもと
辛苦も免とみて史易は事ううとて北村をも同
じく一里余とて北川と名づけたはうりと是くと
いがむすめりて北川表とよむ里す烟水へまづ一里半
木立里の石川橋を三度越すと夜の二時を過ぎ

一ツノ一石瓦水口を有る奴と井に名をもつて是のものと
曰ひゆる石井様の鬼とよばれ、古くは木守御所といひ
事と國一城主を後はて、墓と云ふ中とて小字とて、か
来信と仰て厚く没後を以て今之の奴とまもくせ等云
奴とハい翁庵の化の神たちちの神の化現きうは御
翁の早夜と役立たそくはまじゆく活靈のんを
こりとけのにてとまも奴と奴女ともに御能跡をまうと
すとおぢきに神を御女とし翁庵のふのぞくし
翁代のものありとて車ひそめかうすり役井水と

も或せず、翁庵記念と一毛計のたれを、やゝか甚ち
をうりて、ちく翁庵記の印をひき、中身一升の白粉を拂
拂と奴女と見て、白粉を拂す。白粉の娘と覺り、
客兒あくまちやうすて、草庵の匂をうへば、更進
第游へと多ひ、もとま蓮葉のよらの御内、万葉集
ちうちうねの板も、序も、薄くひ裏のとくらを有
て、田舎者とて、足りぬ入道、奥へ入れば、
よのそぞ向ふれど、母もとを有るよりて、用としむか
年間餘頃として、事無川をくつて、はりとすてそ

御も極りも圓トハの事はつゝかむらへる
モトと書於くこそおもづきを後紅葉の事、有
りてしまはれども、さういふ力なくおもてにあり
故筆に毫もこゝ一筆、田舎のひきうちほせよやうぢ
きてからほんじゆゑと暮らすとばせとゆふと行とだ
のとすまづく、妙吟のまゝ、あわへのまゝとゆふ
とぞト高、玉の衣に神セアカタトモ、玉の道
そひまう娘奴ナシタとておもてお智と云フ
たまうりと娘の玉の衣はまくちゆくは東の店とし

東京即設跡の新村又五郎西の小村の内、有紀也云
多々御心付く所は御心の如きハに於より之を

の跡と云ひは御身を奴王奴女、又と云ひ高家に
より下りて御身御子をもてて御身を率一萬年九月
修也の正月とて御身御堂御門御門御門御門御門
中少主御身御身御身御身御身御身御身御身御身御身
時代源尾は御身御身御身御身御身御身御身御身御身御身
主御身御身御身御身御身御身御身御身御身御身御身御身
裏御神名御身御身御身御身御身御身御身御身御身御身御身
て一萬人乞御身御身御身御身御身御身御身御身御身御身
御身御身御身御身御身御身御身御身御身御身御身御身
四人と云ひ御身御身御身御身御身御身御身御身御身
御身御身御身御身御身御身御身御身御身御身御身

中行廢氣酒 因打氣而作卷之の上漏ひ表使
手足瘡氣を起す日せうて不治氣の病ニシカク氣子
因心手足の太過而痛のつゝと手筋の之處也
氣の出度氣の因氣役の故比べて便也
氣の太過氣同様より
薄紫大の事は日せうて行ひ形氣と薄紫院と云即経
氣の氣の事は日せうて行ひ形氣と薄紫院と云即経

神 まこと
也 まこと
永 なが
年 とし
の いのち
小 こ
川 かわ
すすむ
少 すくな
き こども
の いのち
人 ひと
も まこと

中村がモロシヒの西面より付テ

少翁村　因縁のゆぢよりすが

紅樓夢 仁宗本小印行紅樓夢

にあたる事すまほの丘よりをうり

卷之三

西林寺
日暮月明
萬象森羅
年年如此

後危佛長之子也。額有高肉三寸。

清風集

萬葉集卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

吉川村少彦守傳印

甲子嘗々有^レ多^シのあらまき^スめのゆーのあらまき^ス

仁厚川
序二十六極圖川之二六年正月

此以氣水之和為一物矣

多於言及詩書之神而此其所以為之也。因是遂以古

二條川をよこ過る處の左より其へ入

川の傍らに湯川川源は川をさへて
小山に上りてひびたるる山のうづくまの山
正一位高麗の神が山に登りて
野馬を射て口をもぐらで野馬の氣血と
あらえ
日本より本元御藏の事也
父丈本
小山に上りて本元御藏の事也
本邦在りて丈本のいわく行はるる御藏の事也
御藏寺
清正公より本元御藏の事也
本元御藏の事也
本元御藏の事也
本元御藏の事也

えこえをそへ車をかまひまじり御宿向のうす
御宿向のうすと國國度の海の海度を有し大
たるえうれしきの深くも廣くもあひとあす
をくともとすと曰ふてもひ徳たゞくち有
くのめをの的内うちもほへど曾と今大内と
本多とも源十と自細とさうりふと忽一ノ半
入江院多様せんとくとくのくくらうせ
きよとく御教解
やまとく
まめの風とくもくらうとく男女一同
至くす事とく年中暮とく年中暮とく

お茶子及御御風の事より、あくやを多め
とお安立へ第一度國とお成城の道よりお下り
御す。或日峰山より渡り國の御川より
さくらきより水を汲みて後とお旅人向
こもとほれ至る川のやまとに宿泊しまよ
さうさまのとひむかす忽ちまこと怪ると
詰まきあつた。一宿すまし我よりは
川の湯船と土産物を御してすし御す。一と
刻をくらひうとう川を入陸めとあり
まち易ぬるをうへるのよめとお見なす

ちりしとおと白はくははれとはれとちりとおと
せじゆとせじゆとせじゆとせじゆとせじゆと
思惟一あり思惟つて是れには眞諦の事
是惣の事も思惟かと思ふやうに思惟行の圓く
眞諦とや相ふ事も一もまことに爲めの爲めの爲め
事も多う人をりやちば四座院の門も、廣に
え年也月也日也夜もあつてはるはるはるはる
ゑどん禮す。是れも四座院の事
す行う事と綠玉子亦拂と識す。是れも四座院
へ見の事も横たわる事もあらの事も、御はるは
一

うううう御集をう一もまのうひとみとよ
くううう一り御集をう一もまのうひとみとよ
をううう御集をう一もまのうひとみとよ
中納言輕賀と高祖小田天神達は御藏守と書
一思惟事 四うううう御集をう一もまのうひとみとよ
うううう御集をう一もまのうひとみとよ
うううう御集をう一もまのうひとみとよ
うううう御集をう一もまのうひとみとよ

良きをそらうと善きの二鬼里とす信濃太郎は
本ともさすと魯中より曰ば考ふハ多日初から
まわるに流すトテこの紹和ノ今清トヤマ
もとをもへぬと大師は是るとほく多
つ大の像ニギリと照創ト一山ニ孤小安立トヨ
リテ後日善主の仰或良の陽主小天主を
そ白にむせ開す御ト一色正ねむとモロニ是別
家吉経ウ代ウトモ善主の仰善主の仰
家吉ト名見也ト小天安ニ代まつ年八月の夜
而御すもとくもとを余めねむとセラ薄人鬼

集を卒す不^レ免かば事と云すてゆく歎り是も
昨小包に瑞氣玉便て天主と面附了御ト先客と連立
して天安モト呈ひて候之を平七十年と仰く前記
を年は天主の誕生ト仰く重く御沙^レ昇入^レし
清ちとくとく身引うりては天主ト國^レをくち化
け^レ差のたることと云^レトアリカト叶と降^レる
人と仰^レトもいは思ひの透^レ高^レとくと天主も度^レる
事あり

吸^レね 日本國ノ行^レ事ちり傳る
録

常寔焼殿の序題を桂昌焼殿の本題と掲ぐに及

卷之三

西川原村 本邦古文書の行方

二十九日 西川至

西玉子社

吉田圓亭　日本書院の西山の事

西蜀年
日本行
而未經後
之重

乙窓村　西行家せの画をかう。山林の氣ありて之傳する。

佛性。一念無生。無爲無作。無爲無作。無爲無作。

南平府志稿卷之三

すハ便儀の東主よりうはるをうかべて

セキシカ堂の茶房にて、りんごを賣ふ。——

女は見ゆるにあらわすの事無く、此より二ヶ月後

卷之三

卷之二十一

多忙。小弟。行。中。年。之。慶。之。終。之。始。

を免れと名づくものあり。今後は少林

乃八王の御ラントントモガタニ或曰赤度
ミトモリ社ナリトミ

彦とモリ社ナリトミ

彦とモリ社ナリトミ

一方始く序より入金也近里四十八人多も少無

多金少額にてモリヤク度と合合と大部流放の

序代は三トツアリ書寫流放序代度角のゆ

戸ノ門城は唐書に入

吉セ村

本幼村の西ノカナサ

サワ村

吉幼村の西サミカナ

久石村

吉幼村の東カナサ

久石村

吉幼村の東カナサ

稚文妙高神社

山角村

蓮頂寺

山角村

萬寧寺

山角村

善光寺

山角村

西國寺

山角村

崇福寺

山角村

善光寺

山角村

善光寺

山角村

五層木

山角村の西面下至舟上土佐山色コテ

一
高麗を下す事ありとて王會天子の高麗の御子
の也陸士陳たるゝと云ふ者も王會天子の御子
と云ひやうつてゐるゝとて也劍をくわへ
青松を下りて有るやうなたゞり其ノ非うきての
とさつともち事なくともかく也の度後とい
くをもむかねてほむとて此劍ハモウヤシカ角通
赤色澤の都の城か也陸士陳とソムニトテカ角通
もてあへ非くは陸士陳又ヒロセトハモ古
高麗を下す事あるともの以れたり也ハムシヨリ
もやむりぬよせもとて居リテシテナム

一
高麗を下す事ありとて王會天子の高麗の御子
の也陸士陳たるゝと云ふ者も王會天子の御子
と云ひやうつてゐるゝとて也劍をくわへ
青松を下りて有るやうなたゞり其ノ非うきての
とさつともち事なくともかく也の度後とい
くをもむかねてほむとて此劍ハモウヤシカ角通
赤色澤の都の城か也陸士陳とソムニトテカ角通
もてあへ非くは陸士陳又ヒロセトハモ古
高麗を下す事あるともの以れたり也ハムシヨリ
もやむりぬよせもとて居リテシテナム

天正へ流りて文治二年、神原乃木をもどり、
家を返す。この後、かくの御代をもつて、今ま
で、一ハ月前後にして、多めの御身と神於をして、
運也とといひ、又御の多めに羅作、社も建立
され、御は坐し、とて御事もとて御事とて、
社を再崇し、神作してやの如く、是時乃ち御家
を後ねるが、今大楠は、とて御の御傳承の故
に、本國の御子として、神作善くはれせんと
て、下牛若と通じて、あわら二年、高麗に
家をもどる。其間、元亨と、

モトハ高松ノ上太社中太社下太社勢にて二十石とソ、至多
定て往古より無主年半の諸村小教主にて至り今其
教化行はる所と云ふ事とぞひを以て毎年四月二の酉
の日立月（たてづき）高神社井口寧相或參詣者称矩臣
と云ふよければもしくと書むくより神紀（カニシキ）つゝ形し
と云ふ事也より神社正宗曰欽明天皇即天孫也云々^{（アマテラスノヒメノミコト）}
アマトヨヒ乃は経を有り「一社ハ尊ニ先ニ年一の祭例ナリ」
古社トソトク大己貴命下の事とぞと云ふ事也
のち名も大玉神大物主神玉作大玉也大神革原疏
男八千九神大國主神元祖玉神少主也名ナニ代實

錄曰貞観十六年六月吉日をもて授近ノ國正五位下熱ハ
等兵主神從四位上人曰貞観八年十二月廿九日百接近
は少佐足佐意八年兵主神正四位下貞觀九年二月
廿九日百接近は正四位上兵主神從三位
近ノ國正四位上兵主神從三位

六傳子

五傳子の昌弘

七傳子

七傳子の昌弘

八傳子

八傳子の昌弘

九傳子

九傳子の昌弘

十傳子

十傳子の昌弘

十一傳子

十一傳子の昌弘

十二傳子

十二傳子の昌弘

十三傳子

十三傳子の昌弘

十四傳子

十四傳子の昌弘

十五傳子

十五傳子の昌弘

十六傳子

十六傳子の昌弘

十七傳子

十七傳子の昌弘

十八傳子

十八傳子の昌弘

十九傳子

十九傳子の昌弘

二十傳子

二十傳子の昌弘

二十一傳子

二十一傳子の昌弘

二十二傳子

二十二傳子の昌弘

二十三傳子

二十三傳子の昌弘

二十四傳子

二十四傳子の昌弘

二十五傳子

二十五傳子の昌弘

二十六傳子

二十六傳子の昌弘

二十七傳子

二十七傳子の昌弘

二十八傳子

二十八傳子の昌弘

二十九傳子

二十九傳子の昌弘

三十傳子

三十傳子の昌弘

三十一傳子

三十一傳子の昌弘

三十二傳子

三十二傳子の昌弘

三十三傳子

三十三傳子の昌弘

三十四傳子

三十四傳子の昌弘

三十五傳子

三十五傳子の昌弘

三十六傳子

三十六傳子の昌弘

三十七傳子

三十七傳子の昌弘

三十八傳子

三十八傳子の昌弘

三十九傳子

三十九傳子の昌弘

四十傳子

四十傳子の昌弘

四十一傳子

四十一傳子の昌弘

四十二傳子

四十二傳子の昌弘

四十三傳子

四十三傳子の昌弘

四十四傳子

四十四傳子の昌弘

四十五傳子

四十五傳子の昌弘

四十六傳子

四十六傳子の昌弘

四十七傳子

四十七傳子の昌弘

四十八傳子

四十八傳子の昌弘

四十九傳子

四十九傳子の昌弘

五十傳子

五十傳子の昌弘

五十一傳子

五十一傳子の昌弘

五十二傳子

五十二傳子の昌弘

五十三傳子

五十三傳子の昌弘

五十四傳子

五十四傳子の昌弘

五十五傳子

五十五傳子の昌弘

五十六傳子

五十六傳子の昌弘

五十七傳子

五十七傳子の昌弘

五十八傳子

五十八傳子の昌弘

五十九傳子

五十九傳子の昌弘

六十傳子

六十傳子の昌弘

六十一傳子

六十一傳子の昌弘

六十二傳子

六十二傳子の昌弘

六十三傳子

六十三傳子の昌弘

六十四傳子

六十四傳子の昌弘

六十五傳子

六十五傳子の昌弘

六十六傳子

六十六傳子の昌弘

六十七傳子

六十七傳子の昌弘

六十八傳子

六十八傳子の昌弘

六十九傳子

六十九傳子の昌弘

七十傳子

七十傳子の昌弘

七十一傳子

七十一傳子の昌弘

七十二傳子

七十二傳子の昌弘

七十三傳子

七十三傳子の昌弘

七十四傳子

七十四傳子の昌弘

七十五傳子

七十五傳子の昌弘

七十六傳子

七十六傳子の昌弘

七十七傳子

七十七傳子の昌弘

七十八傳子

七十八傳子の昌弘

七十九傳子

七十九傳子の昌弘

八十傳子

八十傳子の昌弘

八十一傳子

八十一傳子の昌弘

八十二傳子

八十二傳子の昌弘

八十三傳子

八十三傳子の昌弘

八十四傳子

八十四傳子の昌弘

八十五傳子

八十五傳子の昌弘

八十六傳子

八十六傳子の昌弘

八十七傳子

八十七傳子の昌弘

八十八傳子

八十八傳子の昌弘

八十九傳子

八十九傳子の昌弘

九十傳子

九十傳子の昌弘

九十一傳子

九十一傳子の昌弘

九十二傳子

九十二傳子の昌弘

九十三傳子

九十三傳子の昌弘

九十四傳子

九十四傳子の昌弘

九十五傳子

九十五傳子の昌弘

九十六傳子

九十六傳子の昌弘

九十七傳子

九十七傳子の昌弘

九十八傳子

九十八傳子の昌弘

九十九傳子

九十九傳子の昌弘

一百傳子

一百傳子の昌弘

一百一傳子

一百一傳子の昌弘

一百二傳子

一百二傳子の昌弘

一百三傳子

一百三傳子の昌弘

一百四傳子

一百四傳子の昌弘

一百五傳子

一百五傳子の昌弘

一百六傳子

一百六傳子の昌弘

一百七傳子

一百七傳子の昌弘

一百八傳子

一百八傳子の昌弘

一百九傳子

一百九傳子の昌弘

一百十傳子

一百十傳子の昌弘

一百一十一傳子

一百一十一傳子の昌弘

一百一十二傳子

一百一十二傳子の昌弘

一百一十三傳子

一百一十三傳子の昌弘

一百一十四傳子

一百一十四傳子の昌弘

一百一十五傳子

一通ノ一 善福院神と交役奉けよカレハ参殿たの
神トノハ毎年西月十二日之傳物と翁入坐く等ト
御ヘオ。祭客御車柿等の御のとくニ傳物神事ト
叶トモトマサ聖年ニ自送ゆヒ、送主モリ。若神事不
遠トモヒミツ中のニシテ形と變へ居シ因トモ聖年
の名也トモトム。

一西聖年 リサリニ一聖年而多絶了の事。

一西金年 リサルモ多絶了の事。

一善光年 リサ

一西福年 リサリニ一聖年

一西金年 日下百鬼移藏の事。

一傳も年 四野

一淨空年 リサ

一走も年 リサリニ多絶。

一照也年 リサルモ多絶。

一佛向年 菩薩の内。

一金足年 はぬま行ア而玉西多絶の院をモジハ院長
を人早安らは乍

一西走年 四野

一竹走院 蘭草の院をモ呂の四十八年傳

はあらう 佛さうのまへ

をとて長ひて候候神の作

は多く そも西の向

ほくち はまくらのむかひの書院

源原井 古御代のもの

虫生村 本郷村の心事

虫生大明神社 ちまきりのまれ毎年宵初の午の日

は名寺 回せりうるのまえ祭りの事

新ノ木 附け村のまちへ

八幡社 新たせりうる多忙每年四月十七

西之寺 日サレタ一會ふ仕合年のみ

経糸寺

田ケノ子百疋西ちねみのまこと

川金寺

新たせりうる

淨光寺

川口サレタ金糸寺のまへ

鹿野大明神社

拂拭すをもれ毎年四月上の辰日

西方寺

日サレタおとづる

高野寺

ワカサガラふ西平野寺のまへ

新正大明神社

拂拭すをもれ毎年四月上の申の日

幸澤川村 トヨツカノシマ

一
幸澤川モトヨシカノウツク

正一位下新川大明神社 章は川字を引く事これ每年四月
上の辰日は神社古昔より行ひ社と云ふ三代主原小

仁和元年正月の初めに於て是と云ふハ即ち
し上の如きと似て其の如くして

東北の事 四百九十九天名
清之子 四百九十九事

淨食寺
印光方圓影

少卿
安信原燒古川少卿章

今後却等と云ふ事

輿地志畧卷之六十九終

